

## 在住外国人と地域の活性化

在住外国人というと支援を受ける対象としてイメージされがちではないでしょうか。もちろん、在住外国人の方々に安心して暮らしていただくために支援は不可欠です。しかし他方、在住外国人の方々の活動が地域に活気や活力を与え、自治体の側も多様な背景をもつ人々が地域の中で暮らしていることを「地域の大切な資源」として捉えて、独自の魅力的なまちづくりを行おうとする取り組みも実施されています。今回は在住外国人が地域の活力や地域経済の活性化などに貢献していることに焦点を当て、有識者のご寄稿とともに各地で展開されている取り組みのいくつかをご紹介します。地域での在住外国人の活動、活躍を知り、今後の取り組みの参考にさせていただけたらと思います。

### I 在住外国人と地域の活性化についての総論

#### 在住外国籍住民による地域の活性化と文化創造

大東文化大学環境創造学部 教授 川村 千鶴子



#### はじめに

自治体は、地域の多言語化にともない、在住外国籍住民へのさまざまなサービスを行う。多言語多文化社会に対応するために多大なエネルギーと共生コストがかかる。外国籍住民の増加は、自治体や地域の負担となり、ボランティアやNPOの支援にも大きく依存している。

はたして「移民・難民は地域のお荷物」なのだろうか。

統計資料というのは、実はとても表面的で数値は必ずしも内面を映し出さない。数値の裏に隠れている地域の情景を探ってみよう。

外国籍住民のライフサイクルにそって、彼らがどれほど地域の活性化や文化創造に貢献しているかを検証してみると、持ちつ持たれつ相互行為を繰り返し、地域コミュニティを支えている実態が見えてくる。

外国籍住民が集住する多文化都市や地域では、多くの留学生がともに学んでおり賃貸住宅の空洞化を防いでいる。アルバイトやエスニックビジネ

スの起業は、経済的衰退を防ぎ、地域の活性化に繋がっている。さらに海外送金は、母国の家族を支えていることも多い。

一方、多文化都市の歴史的変遷を見つめなおしてみると、都市に繰り返される新しい文化創造は、周辺的な人々（marginal person）によって行われていることが多い。メディア移転、技術情報の移転、経済の発展だけでなく、世紀を超える文化創造が、外国人によってもなされていることを紹介したい。

#### ホームレスに食事を運ぶトンガ人留学生

90年代、新宿駅周辺には、ホームレスがあふれていた。そこにジャガイモと鶏肉を煮たお鍋を運んで一緒に楽しそうに食べているトンガ人留学生と出会った。「トンガは太平洋に浮かぶ貧しい島国だけど、ホームレスはいない。日本は裕福な国なのにホームレスがあふれている。僕が食べ物を運ぶとホームレスの人々が美味しそうに食べてく

れる。友達になれた。来日してから、一番幸せを感じた瞬間だった」。

### インド人と韓国人ビジネスマンの道路掃除

「おはようございます」。千鳥ヶ淵の朝のウォーキングコースで、声を掛け合うのは、インド大使館の職員たちだ。彼らは早朝、箒とゴミ取りをもって広い周辺地域の道路清掃を行っている。

一方、新宿では、起業に成功した韓国のビジネスマンが、道路清掃を毎朝行っている。「僕たちは単に稼ぐために日本に来たのではない。少しでも地域の役に立ちたい。何か地域のためになることをボランティアでやりたいといつも思っているのです」。

### 高齢者の孤独死を防ぐために

「介護ヘルパーの資格をとってから、ずっと地域のお年寄りの介護に回っています。日本は、高齢者を大事にする国だと思っていましたが、孤独な寝たきり老人が、都会の中に沢山いることに気付いたのです。おばあさんが、あなたは韓国人だけど、親切にしてくれるとあって喜んでくれます。おばあさんの笑顔が嬉しくてこの仕事はやめられません」。そう語る韓国人女性は、地域の介護サービスを続けている。

### 富山県のパキスタン人

富山では、パキスタン人の団体が、近辺のゴミ拾いや道端の花壇整備などを行っている。地元の人々から高く評価されている（『北日本新聞』2004年10月14日）。彼らパキスタン人は、中古車業者周辺のトラブル回避のために自治会と市役所が始めた地域パトロールにも協力している。トラブル回避に効果があったそうだ。

### 東日本大震災の被災地に向かった 難民ボランティア

ミャンマー、ウガンダ、中東諸国の難民の人々が、陸前高田市の瓦礫撤去にバスで向かった。ミャンマー人たちは、ビルマ料理を提供するだけでなく瓦礫の撤去にも取り組んだ。自分たちの生活も困窮しているのに、なぜ、支援に向かうのか聞

いてみた。

「僕たちは、日本に来てからもう20年以上にもなる。難民認定されてからも苦しい日々を送ってきた。祖国の国籍も日本の国籍もない無国籍だけど、人々の役に立つことをしたかった。被災地の方々が、ありがとうと連発してくださった。そうしてもらえて本当に嬉しかった。瓦礫の撤去は、重労働だったけど、疲れたとは誰も言わなかった。何か日本にきて役にたったのだ」。

### 地域は持ちつ持たれつ

ここにあげた支援の事例は、地域では目立たない小さな貢献である。美化活動、通訳ボランティア、相談窓口、母語教育、小学校・保育園では、お知らせの翻訳などに尽力している在住外国人が多い。宗教施設では、相互扶助のネットワークができあがっている。韓国系キリスト教会、ムスリムのモスク、ビルマの仏教寺院などでも、困難や悩みを語り、ともに祈る場を創造し、大切な時空を守っている。多文化社会を生きることは、誰もが困難にぶつかることがあるとつくづく思う。

多文化都市における外国人の集住化は、結果的に空洞化を防いでいる。アルバイトやエスニックビジネスの起業は、経済的衰退を防ぎ、地域の活性化に繋がっている。災害にあえば、助け合うのは、隣人であり、地域は持ちつ持たれつである。長年住んでいても、市民として対等の権利をもっているわけではなく、もっと地域貢献をしたいと思ってもどのようにして実現するのか分らないことが多い。親切のつもりでやったことが、地域の誤解をうけてしまうこともあるという。自治体はそういった外国籍住民の気持ちをうけとめていくことが大切だと思う。

### 身内の外国人

そして地域住民を「外国人」と「日本人」とわけて考えるのも、実態にそぐわない。国際結婚の増加によって、家族内はトランスナショナルに変化した。

かつて日本人同士の婚姻件数は、年間100万件を超える時期もあったが、昭和55年あたりをピークに年間70万件を横ばいに推移し、緩やかな減少

傾向にある。一方、国際結婚は、平成に入って急増し、平成2年時点では2万5,000件にまで増加、その後も増勢を示し、平成17年には遂に4万件に達している。誕生する子どもたちは日本国籍を取得している場合が多いことを忘れてはならない。国や自治体は、数値に表れにくい親密圏の変容を捉えて政策を練っていくことが大切なのだ。

### 国際結婚は地域の文化創造

社会的に認められた正規の婚姻制度によって正式書類が出された国際結婚の第1号は、明治28年だった。

クーデンホーフ＝カレルギー光子こと青山みつは、明治7年、現在の新宿の商家に生まれた。明治25年、店先で一人の青年が落馬したので医師を呼びケアをした。当時の駐日代理大使として東京に赴任していたクーデンホーフ＝カレルギーは、光子のケアを受けて恋に落ちる。周囲の猛反対を押しきって結婚。長男ハンス光太郎、次男リヒャルト栄次郎の2人の子を東京で出産。明治28年に初の正式な国際結婚の届出が出された。光子は日本国籍を喪失、カトリックへ改宗し、オーストリア＝ハンガリー帝国へと渡る。広大な領地をもつ伯爵家の夫人となった。7人の子に恵まれ、ホームシックを克服して英語、ドイツ語、フランス語を習得し、歴史・地理・社交界のマナーを猛勉強した。日本の国際的地位が高まると、偏見や差別も和らぐのだが、明治39年夫が心臓発作で急死。伯爵夫人として子供たちの教育のため財産を処分しウィーンへ転居。オーストリア＝ハンガリー帝国と日本は敵国として戦うことになり差別は強まり、過酷な運命を辿る。

戦争が終わると、次男リヒャルト栄次郎は、「汎ヨーロッパ主義」を著し、ヨーロッパ論壇の寵児となったことは有名である。第一次世界大戦でオーストリア＝ハンガリー帝国が崩壊し財産を消失、郊外で静養の日々を過ごした。日本大使館に出かけては、大使館員たちと日本語で世間話をし、日本から送られてくる新聞や本を読むことが憩いのひと時であったという。ついに日本への里帰りではできなかったが、後に「ヨーロッパ統合の母」と呼ばれる。

### 地域の歴史は語り継がれる

筆者が、着目するのは、こうした国際結婚が、有名無名を問わず、100年を経過した現在でも多数の小説や映画、TV番組、漫画に再現され、新しい文化創造に貢献していることだ。化粧品会社ゲランが、「MITSOUKO」という香水をつくって商品となった。時代に翻弄されながらも歴史物語を包含する商品の付加価値を高め、ブランド・ロイヤリティを高めた。「MITSOUKO」には、多文化社会を生き抜いた明治の女性の凛とした香りが漂ってくる。平成23年のミュージカルのテーマにもなっている。

### 文学者小泉八雲の結婚

同じ明治28年に、もう一つの国際結婚が誕生している。イギリスの英文学者ラフカディオ・ハーンは、明治23年40歳で、米国の出版社の通信員として来日。島根県松江市の尋常中学校の英語教師として教鞭を執った。気管支炎になったハーンを一生懸命ケアしたのが、松江の小泉湊の娘・小泉節子であった。明治26年長男が誕生後、ハーンは小泉家の婿養子となった。明治28年12月12日に届け出を出して、「日本人タルノ分限」を得、小泉八雲として節子の戸籍に入ったのである。明治29年には、東大の英文学講師、46歳のとき、帰化の手続きが完了し「小泉八雲」と名乗る。秋には、牛込区市谷富久町21番地に転居する。明治37年に逝去するまでは、新宿大久保で過ごした。八雲の人生も移動に満ちている。松江、熊本、神戸、東京へ居を移しながら日本の英語教育の最先端で尽力し、欧米に日本文化を紹介する著書を数多く遺した。八雲が、現在の新宿区大久保小学校の父兄の一人として、講演したことも伝授され、終の棲家は、小泉八雲記念公園として住民の憩いの場となって親しまれている。国際結婚が、文化を創造している例は枚挙にいとまがない。

### おわりに

このように外国人との出会いの歴史を見つめなおしてみると、新しい文化創造は、周辺的な人々(marginal person)によって行われていくことが

多い。目に見える地域貢献だけでなく、このような文化創造も外国人による大きな社会貢献といえるのではないだろうか。

そして外国人の日本での暮らしは、世界中で語り継がれる。日本に暮らして帰国した人々や別の国に移住した人々が、日本の印象として思い出を

語ることになる。

自治体や地域の暖かさは、世紀を超えて伝授される。何世代にも繋がるライフサイクルという長いスパンをもって、多文化政策の策定が必要なことを教えられた。

## The Multi-culture Merit・多文化効果

愛知県犬山市 市議会議員 ビアンキ・アンソニー



「多文化共生」や「国際化」などはよく聞く言葉だが、本当の意味は何だろうか？メリットはどこにあるのか？実現するには必要なものは何か？私は専門的な知識はないが、自分の経験から学んだことや気がついたことについて数点述べさせて頂きたい。

多文化共生のメリットと国際化が同じ硬貨の表と裏と言える。始めに国際化は何か。いろんな角度から考えられる。一つに法的、例えば、外国人が住民票を取れないこととか。住民票が必要な時に困る。そこで日本人との間に日常生活で大きな差が起きる。法律から格差が廃止されるのは当たり前前のことある。それは国際化の一つ、制度的な国際化と言える。

しかし、人が心の中に持っていることや頭に思っていることは法律で規制できないから、もっと基本的なこと、社会的なレベル、草の根の国際化について話したい。社会は制度ではなく生きているものである。社会は人でできて、その人々の日常生活である。その中で、人種や国籍に関係なく誰でもが気楽に日常生活ができるようであれば、その社会は国際化されたと言える。実現するには、視野の広い国際人育成が必要である。

国際人とはどういう人か。別に諸外国のことをよく知っているとか、色々な文化に詳しいとか、複数の言葉を喋れるとか、そういった人の話ではない。私には国際人とは相手の習慣などが自分と違って、独善的に早急な判断をしない人である。相手の習慣など理解できなくても、興味を持ってなくても、自分の習慣や価値観以外にもあると認められる人である。根本的にどんな相手でも、そ

の存在を尊重できる人である。やはり、相手を尊重しないと、相手からも尊重されることを期待できない。とにかく、そういった国際人になるように必要なのは意識改革と経験だけである。

世界をどう見るのかは、経験によって違う。私の経験から例を挙げさせて頂く。アメリカは移民の国で、うちの先祖はイタリアからである。私はニューヨーク市のブルックリンで生まれて育った。ニューヨーク市は五つの大きな独立区、バローというもので出来ている。ブルックリンはその中で一番大きく人口が多い、多民族のバローで、様々なエスニックエリアがある。

ブルックリンに入ると「ブルックリンへようこそ」という看板がある。「ようこそ」の下に“Home to Everyone, From Everywhere”が書いてある。簡単な英語だが響きのある表現で、日本語にすると難しい。「世界中からきた皆さんの古里」要するに、各国から来ている方々はブルックリンに住んでいる。それはブルックリンの強みである。

または同様の看板にブルックリンらしいエスニックな表現などもある。例えば、私が生まれた場所から近いところに橋があり、その橋を渡ればブルックリンを出る。そこに、「ブルックリンを出る」という看板にイタリア系訛りで「Fuhgeddaboudit」と書かれてある。その意味はアメリカ人にも説明しにくいですが誰もが聞いたことがある。他にもあるがポイントは、こちらで我々は人種や文化の多様なことを誇りに思っているこ

とだ。

仕事や学校に電車で通っていたとき、アイルランド系、スペイン系、中国系、アフリカ系の人々が乗り降りし、各国の言葉を耳にした。わからなくても、興味がなくても目にも、耳にもした。文化が違って、宗教が違って、肌の色が違って、様々な人々が自分と同じように日常生活をしているのは当たり前のことである。子供のときから当たり前と思い、自然にまわりにあったことによって大きな勉強になっていた。なぜこの例を挙げるかという、育った環境のまわりに色々な人々がいると、それに慣れるのは当然である。逆に、反対も言える。そう言った経験ができる場が少ない日本では、どうしたらいいのか。

日本はアメリカのような多民族の移民国である訳はない。ならなくてもいい。日本は日本としての歴史がある。しかしながら、もう少し国際的な視野を持っている国民や市民を増やせば望ましいと考えられる。そうでなければ、このCLAIRは存在していない。そうでなければ貴方はこの記事を読んでいないし、私は書かなくていいのである。

全国の市町村はブルックリンのようにエスニックエリアが多いわけではないのに、我々が多くの人に国際人になりうる経験、国際的な視野を身につける意識改革が出来る環境がある。それはまわりにいる外国人や外国人コミュニティーである。その外国人コミュニティーの存在と外国人の居場所を認めるのは第一歩である。出来れば国際人、国際視野が広い一般市民を増やす。それで初めて多文化共生ができ、そして結局、The Multi-culture Merit多文化効果が受益となる。

多文化効果を個人的な観点から説明する。ブルックリンの多くのエスニックエリアのなか、イタリア系のところで育ったからこそ、自分のアイデンティティをしっかりと身につけた。それで、文化が違う相手の習慣・食文化・祭など、自分のと比べ、おかしいと思うより、面白いという感覚ができたし、自分の文化も違う角度から見え、より深くわかるようになった。

相手がおかしいと思うことから面白いと思うことに切り替えるには、ただの小さな意識改革だが、難しい。自分の文化に自信を持つことが前提にあ

るが、何よりも大事なものは経験である。日本でそれは一番難しい。別に日本に問題があるからでなく、もっと物理的なことである。島国であり、ほとんど単一民族であり、貿易等で世界に繋がっているが、一般日常生活のレベルで外国の方々に接する機会が少ない。もう一つ、ちょっと厳しいかもしれないが、あまりにも外国人やよその文化に接することや外国語をしゃべれば日本人ではなくなるような曖昧な不安があるのではないかと感じている。そういう気持ちは邪魔になる。だからこそ、日本にいる、頑張っている真面目な外国人を認めれば、その二つの問題を乗り越え、日本人にも、日本にいる外国人にもプラスになる。そして、必ず一般人の中で国際人が増える。増えれば増えるほど多文化共生が達成出来るのである。

多文化共生が達成すれば、個人だけではなく、社会というよりもわが国に大きな利益に繋がると信じている。また、自分の経験例として挙げさせて頂く。私が育ったニューヨークは何々系で出来たまちだけではなく、多くの外国人も、勉強や仕事のため生活をし、活躍している。当然生活しているまちに愛着を持つようになることは当然である。言葉や文化が違うから、日々摩擦が全然ないとは言えないが、真珠は摩擦で出来ている。同様に、皆が力を合わせて一緒になると、ものすごいパワーになる。お互いにレベルアップする。いざという時でも、お祝いで盛り上がる時でも、どんな時でもまちの強みになる。

日本でも同じように外国人に居場所を提供すれば、外国人コミュニティーを歓迎すればわが国の強みになることは間違いない。

## インタビュー

ご寄稿いただいたThe Multi-culture Meritについて、犬山市で取り組んだ具体的な活動をお聞きしました。そこで、ピアンキ・アンソニーさんご自身が行われた、地域の国際化や活性化に貢献された代表的な二つの活動、「犬山NETプログラム」と「Bブリッジズ交流団体の活動」について以下にご紹介します。

## 犬山NETプログラム

### ●NETプログラム（注1）で犬山市独自の英語教材を制作

私はJETプログラムのAET（英語指導助手）（注2）としてはじめて日本に来た。私が犬山市に来たとき、中学校に来ていた外国人講師は派遣会社を通じて来ていた。私は「外国人なら誰でも外国人講師として適任という訳はない」と思い、きちりとした資格を持った講師を使い、市との直接契約にすべきだと提案した。当時の教育長には提案を受け入れていただいた。

また、毎週金曜日に外国人講師と会議を持ち、共通の外国人講師用のテキストを作った。その後、議員になって議会で正式にテキストの製本化が認められ、現在では各中学校が同じテキストを使いNETプログラムという名前で授業が行われている。



教室の様子

る。現在、NETプログラムは15年目を迎え、犬山市の中学生の学力標準テストの結果が全国平均よりも10ポイント高いという成果も出ている。

（注1）犬山NET（NET:Native English Teacher）プログラムとは、犬山市独自の英語プログラム。

（注2）AET:Assistant English Teacherのこと。現在のJETプログラムでは、ALT:Assistant Language Teacher（外国語指導助手）と呼ぶ。

## Bブリッジズ交流団体の活動

### ●「Be bridges!」架け橋になれ！

Bブリッジズ交流団体（注3）を立ち上げたのは、2005年である。グループ名はニューヨークのブルックリン地区のシンボルであるブルックリンブリッジに由来している。橋は交流のシンボルでもある。ブルックリンのBをとって、Bブリッジズとした。これには「Be bridges!」架け橋になれ！という意味もあることがわかった。

（注3）Bブリッジズとは、アメリカニューヨーク市のブルックリンにあるザバーリアン高校との交流を行う団体。

### ●犬山市民とニューヨーク市民の交流

私が卒業したザバーリアン高校から、2005年に



Bブリッジズの活動

先生含め70名が犬山市を訪れることになった。メンバーはジャズバンド部とコーラス部で構成されている。ホームステイや様々な交流イベントなどを通じて日本の文化などを学んでいた。

一番初めに犬山市にニューヨークから70名が来られることになったとき、どのようにホームステイ先を探すかが大きな問題だった。当時、面倒くさい、余計なことはしたくないという風潮があったためだ。

そこで、ホストファミリーになることを無理に頼むのではなく、やりたい人を探そうと思った。まず24時間のサポート体制を持つことを約束し、ただの宿泊先としないで、ホストファミリーが楽しめるようなイベントを企画するなど、工夫した。例えばフェアウェルパーティでは来賓など呼ばず、ホストファミリーを主賓にした。その結果、地域の方々から「またやって欲しい、楽しかった。」と言ってもらえ、次回につなげることができた。以来、ザバーリアン高校の生徒は3回犬山市を訪問し、来年春にまた訪問を予定している。

2006年にはホストファミリーを引き受けた家族などをニューヨークへお連れし、ザバーリアン高校の生徒の家でホームステイをしながらニューヨークの文化を体験していただいた。そして現地の



ジャズバンド部

さくら祭りや学校での日本文化デーでは、日本の豆腐作りを紹介し、書道のパフォーマンス、下駄、日本の漫画本などの展示、販売も行い、その売上金は高校の交流活動に寄付してきた。アメリカでどのくらい日本文化に興味を持たれているかを認識していただきたかったのだ。ニューヨークとの交流は継続し、すでに3回ニューヨークに渡っている。

交流を通じて日本に興味を持つザバーリアン高校の生徒が増えたので、Bブリッジズから2回にわたり日本語講師の派遣を行った。また生徒から「JETプログラムに参加したい」とか「日本で仕事がしたい」などたくさんの相談を受けている。

2007年にはニューヨークからザバーリアン高校の生徒が来て、失業した外国人支援のチャリティのためのコンサートを行い、およそ20万円を犬山市に寄付した。今年の東日本大震災では、ザバーリアン高校内でチャリティーコンサートが企画され、1万2,000ドルの義援金を犬山市まで持って来てくれた。我々は、それを受け、犬山市でもザバーリアン高校音楽部顧問の先生の歓迎とお礼のチャリティーイベントを行い、約43万円を集め、すべて犬山市を通じて寄付した。

## II 地域の取組事例

### 多文化共生による街おこし～世代と国境を超えた交流～

川崎市ふれあい館 館長 三浦 知人

川崎南部コンビナート地域に隣接する私たちの街は、関東では有数の在日コリアン集住地域を形成している。戦争時代の軍需産業、そして、戦後の高度成長を支える働き手として、朝鮮半島のみならず、貧困、出稼ぎを余儀なくされた東北の農村の二男三男、沖縄出身者、エネルギー政策の転換により職を失った北海道や九州の炭鉱離職者が、仕事を求めて集まった。働くものの街である。そして、近年は、韓国のみならず、フィリピンや南米、中国から国境を越えて暮らす人たちが多く居住するようになった。地域に暮らす人たちのほとんどが、それぞれ別の地域文化、民族文化を持っていて、「我が家自慢」が「多文化」に直結する潜在的な人材を有した街でもある。

民族差別をなくす日コリアンを中心とした市民の地域活動の延長線として、川崎市ふれあい館が1988年に開設された。民族差別をなくし、共

生の街を創ることを掲げ、行政が市民運動とパートナーシップを結んで開設した市民参加型の会館である。

公的な会館に在日コリアンが社会参加の場を得ること、税金で民族差別をなくし、コリアン文化の学習活動や人権啓発を推進する活動を行うことで、地域社会の外国人当事者が大きく力づけられた。長く社会保障制度の枠外に置かれ、就職、住宅、結婚などの生活の根幹にかかわる部分に厳しい民族差別の壁が立ちはだかる生活史を刻んできた在日コリアン社会には、あきらめ、絶望、自暴自棄があふれていた。ふれあい館ができたことで、自分たちも地域社会の一員として、参加と発現をすることが推進され、隣人としての日本人が見えてきて、共に困難を分かち合う協働が生まれた。さらに地域の商業者も、「コリアンな街」を街の活性化に生かそうと、地元商店街が中心となって、



春の祭16回

街づくり協議会が結成され、「共生の街づくり」を掲げた。そして、毎年行われる商店街の「日本の祭」では、メインイベントとして、コリアンの民族打楽器を打ちながら踊る「プンムル」パレードが企画され、ふれあい館が協力して150名の老若男女が、あでやかな民族衣装に身を包む。8割方が日本人である。毎年の地域の小学校の運動会では、子どもたちがプンムルを披露する。20年余続けられた文化活動によって、コリアン民族楽器「チャンゴ」のリズムが軽快に打ち鳴らされると、自然に体が反応する若い保護者も現れる。「久しぶりにたたかせて」と、運動会に参加する日本人保護者の姿に、「民族文化」というよりは「わが街の誇るべき地域文化」として紹介したほうが実態に近い。

ふれあい館が主催する世代間交流イベントでは、盆踊りとコリアン民謡 和太鼓とチャンゴが共演し、チマチョゴリと浴衣をそれぞれいっしょに楽しむ風景がある。フィリピン人の青年のアップテンポのヒップホップダンスに、在日コリアン高齢者が乱入し、国境をまたぐ者同士の共感が生まれたり、在日コリアン高齢者の識字学級に参加する日系南米の高齢者が、在日コリアン高齢者の戦時中の被差別体験の証言を聞いて、自ら日系人として収容所生活を強要され、財産を没収された体験を語り、互いの労苦を共感しあう場面が生まれたりしている。こうしたすごく魅力的な場を、自分探しをする日本人はほっておかない。自らの居場所ができ、閉鎖された場づくりではなく、積極的な社会参加と発現、交流を行うことで、魅力あふれるここだけにしかないユニークな場が創ら



多文化盆踊り

れ、それを求めて人が来て、また、そうした人との出会いによって、素敵な交流が生まれる。それは紛れもなく街の財産である。

ふれあい館で培ってきた活動の積み重ねは、近年国境を越えて暮らす外国人市民の生活課題の解決に寄与できることがあるだろうと議論を深めてきた。街には、帰国すればハイクラスな地位を約束された外国人市民もいるが、ふれあい館に居場所を求めている外国人市民の多くは、たくさんの生活課題を抱えた方々である。地域のフィリピン人母子の課題に出会う中で、もっと力強い活動の必要性を感じ、14年前、フィリピン人スタッフを迎え入れた。そして、子どもを巡る支援を協働で取り組み始めると、フィリピン人スタッフの周辺に、地域の母親たちのネットワークがすぐ生まれた。在日コリアンの子どもたちの取り組みに触発され、すぐ、フィリピンにつながる子どもたちの仲間づくりの場として「ダガットクラブ」が始められ、フィリピンの踊りや遠足、学習支援などが、母親たちのネットワークの中で組み立てられていった。多くの人が、ダガットクラブの文化発表に参加することで、自信を得て、母親たちも日本の学校や制度、日本語の学習をする自発的取り組みが深まり、母親たちも子どもたちに負けずに、文化発表しようとして「カワヤングループ」が結成された。そして、学校で子どもたちにフィリピン文化を教える講師として活躍したり、教員研修などに講師として参加したりするフィリピン人ママの元気な活動が展開された。多くが日本人との国際結婚であり、日本籍の子どもも多いが、ママがためらうことなく母語で喜怒哀楽をわが子に表現できること





タガット

は大切なことである。民族的つながりを求めて、クリスマスや発表会は、大変な労力をかけて、地域に開かれた場を作った。

その母親たちが、フィリピン食材の共同購入を始め、さらに地域社会で困っている当事者にも広く提供するため、商店街の協力を得て、フィリピン食材の屋台「サリサリストア」を始めた。そこで、地域で孤立するフィリピン人の母親との出会いがあったり、商店街のおじさんたちの励ましを受けたりして、雨の日も冬の日も運営した。

「小さくても自分たちの場がほしい」

こうして、多くの人の支援で、店舗を借りて「カワヤン情報センター&サリサリストア」がオープンした。

「サリサリ」は、タガログ語で「いろいろ」という意味。調味料やお菓子、缶詰などフィリピンの食材などを販売しています。

フィリピンの食材を手に入れるのに不便という母親たちの願いから始まりましたが、地域のフィリピン人がいつでも寄り合える居場所がほしいという願いを具体化し、さらに、日本に暮らす外国人の生活のよりどころとなればうれしいです。日常会話ができても、子どもの病院の説明がわからなかったり、入学手続きや学校からのおたよりがわからなかったりします。日常生活では、多くの疑問や悩みを抱えてしまう母親たちが、情報を手に入れ、先輩に母語で悩みを打ち明けたりできる場として育てられたらうれしいです。

カワヤングループ代表 ローズマリー・サルヴィオ（川崎市ふれあい館職員）



多文化料理講習会

カワヤンの取り組みの経験を基盤として、さらに多くの外国人当事者の居場所づくりにつなげるために、かわさきくコミュニケーションボランティアという翻訳通訳ボランティアの市民団体と連携し、「多文化共生センターかわさき」として、昨年オープンした。まだまだ、運営上の課題はたくさんあるが、地域に自分たちの居場所を創ることで、周辺の日本人との交流が生まれ、フィリピン料理を楽しんだり、言葉を学んだりする取り組みの活性化を図りたい。

「違うってすてきなこと」と積極的に出会いを求める日本人市民は少なくない。さらに、国境を越えて暮らす外国人市民の生活力は、多くの日本人市民に力を与えている。1945年の廃墟の中、何もなくなって、生きることに必死にならざるを得なかった時代、地域社会では日本人と朝鮮人の庶民レベルの交流があった。川崎に行けば何とかなると、多くの職を失った人たちの大移動があり、その生活指南役を果たしたのは朝鮮人住民であった。朝鮮半島の農村で、米も野菜も味噌、醤油も、酒も野草も、自給自足の村生活を送ってきた多くの朝鮮人の母親たちは、自ら生きるノウハウにたけていた。日本人の食さない牛の内臓肉を朝鮮風に味付けして、重労働で働く人たちのスタミナ食としてどぶろくと一緒に出した。路地で野菜を作り、山で野草を摘んで分け合った。関東域に暮らす朝鮮人市民の食文化の供給地として、1980年代まで機能した私たちの街の商店街では、盆や旧正月の時期には、法事料理のタラの切り身が魚屋で並び、暮れになると、キムチを漬けるために、八百屋に白菜がうずたかく積まれた。社会の隙間



サリサリストア開店

で生きる術を作り出す力により、私たちの街の日本人市民の何人かは「私は朝鮮のおばちゃんたちのおかげで生きてこられた」と証言する。時代を経て、今日もまた、国境を越えて暮らす市民のパワーが、確実に周辺日本人の生き方を左右する力を発揮している小さな交流が、毎日常まれている。



多文化共生センターかわさき

名所旧跡はないけれど、戦争をはさんで生き抜いた働くものの街であり、そこに暮らす人々の背景には、様々な地域文化、民族文化があふれている。一人一人が自分を表現し、出会いを楽しむことで、多文化な街の財産が花開くことを期待している。

## 笑顔と友情の架け橋に～在住外国人と地域の活性化活動に取り組む～

### 特定非営利活動法人ABT豊橋ブラジル協会

#### はじめに

愛知県豊橋市に在住する外国人は1万6,245人といわれ、県下で2番目に多い。その内ブラジル人は8,866人であり県下で最多である（2011年現在）。市の近郊岩田地区には、多くの日系外国人が集住している。豊橋駅から10分程度で利便性がよく、日系外国人向けの学園や公立学校のある静かなところで、食料品店・スーパー・コンビニなどもあり、親しみがもたれている地域となっている。

非営利活動法人（NPO法人）ABT豊橋ブラジル協会（H16年設立）は、H20年6月にNPO法人化された後、もと学園であったところにその活動拠点を移した。この拠点を「エスパソABT（注1）」と名付けて在住外国人と市民に対して、相互の交流、共存共生にかかる事業を行い、もって地域の活性化につながる活動を行っている。まさにエスパソという意味は、友情の空間、共生の空間、交流の空間などのことで、その想いを込めて名付けたものである。

（注1）ABT=Associação Brasileira de Toyohashi 豊橋ブラジル協会

#### 主な活動

ABTの活動は、①在住外国人に対する地域福祉に関わる事業、②在住外国人に対する国際協力に関わる事業、③在住外国人に対する健全育成事業、④地域住民に対する国際交流に関わる事業を4本の柱として、自らの仲間とだけではなく、すべての外国人をも巻き込んで日本の社会・市民の中に溶け込み、ともに共生できる友情の絆を築き、地域の活性化と国際交流に貢献することを目標にしている。

#### Somos Amigos ～友だちになろう～ 豊橋ブラジルDay

ブラジルと日本の文化交流を通してお互いの理解や親睦を深める「豊橋ブラジルDay（注1）」を、9月7日のブラジル独立記念日に近い第一日曜日に毎年豊橋公園にて開催している。このイベントには市内だけでなく、静岡の浜松市、湖西市など近隣や三重、関東のブラジル人、そして地域の日本人住民も参加し、約3万人が集まる。お互いの交流の輪を広げるのを目的に、ライブやダンスな

どさまざまなイベントを繰り広げる。ブラジル人には母国を懐かしんでもらい、また、家族で一緒に楽しんでもらえる場に、そして日本人にはブラジル人・文化との交流の場になればと願う。

会場に軒を連ねた約70軒の屋台では、ブラジル料理のお店が多い。「シュラスコ」(牛肉の串焼き)、「パステウ」(ミートパイのようなもの)、「コシンヤ」(コロッケのような見た目の中身は鶏肉)、「フェイジョアード」(豚肉とソーセージ、黒豆などを煮込んだ料理)など多くのお店がある。日本に居ながらにしてここでは本場の味を楽しめる。他に、ホットドッグやピザ、お好み焼きなど多国籍の料理が出店されている。他には、ポルトガル語の書籍、衣料品、化粧品、民芸品などの雑貨など、さまざまな屋台が出店され、終日大勢の人でにぎわいを見せる。



豊橋ブラジルDay 2010

特設ステージでは、陽気なブラジル音楽や華やかで魅力的なサンバダンスが披露され、会場の人たちも音楽に合わせて歌い踊りだす。他にブラジル国技の格闘技カポエラの演武、ブラジル人学校の生徒たちはダンスを披露。日本からは、地元県立高校の学生によるブラスバンドや和太鼓の演奏、市内のグループによるよさこい踊り、居合道演武を披露し、両文化の相互理解をさらに深めるステージを作りあげる。芝生広場ではブラジルと日本の子どもたちがフットサルの試合を行うなどして交流を深める。

愛知県警も参加しており、パトカー乗車体験、マスコットと一緒に記念写真撮影、県警からは交通ルールの解説や地域の防犯情報の提供など受け

ることができる。日本のことをもっとよく知ってもらい日本人住民との摩擦を防ぎ、もっと安心して暮らしてもらいたいと考えている。

朝から開催されていた豊橋ブラジルDayも、夕方6時には終了する。フィナーレを飾るのは、ブラジルから招いた有名アーティストのライブである。ステージ前には大勢のブラジル人、日本人が集まり両手をあげてリズムにのる。歓声が上がリ、熱気を帯びた熱い参加者たちの笑顔がまぶしく光る。

情熱的で陽気で活気あふれるブラジルのパワーが豊橋をさらに元気づけてくれる一日となる。

(注1) 2011年度の豊橋ブラジルDayは開催中止。

## インターネットラジオ「Radio Nikkey(ラジオニッケイ)」 ～ブラジルと日本市民のみなさまとの輪～

ABTが運営する「ラジオニッケイ」は、行政と在名古屋ブラジル総領事館からのお知らせや日常生活のヒントなど、日本での生活に役立つ情報をお届けする。ブラジルコミュニティーが関心を持つすべての公的機関のお知らせを伝える目的を持っている。子どもの健全な育成、スポーツ、日本人市民との多文化共生社会づくりに関わる当協会の活動に重要な役割を持つ。

### ① 日系ブラジル人のみなさん、頑張ろう！ ラジオ講座で日本語学んで

豊橋国際交流協会の委託を受けて、市内に住む日系ブラジル人らを対象にインターネットラジオの日本語講座「Vamos ganbatear! (バモス・ガンバチアール=頑張りましょう)」の放送をしている。滞日年数が長くても日本語を話せない人は多い。講座で学び、一言二言話せるようになれば地域住民との交流もさらに深まっていくものと期待している。

### ② 市長のインタビュー

豊橋市長から、市の旬な話題などをインタビューしてきたものを月に一回放送している。市長は以前ブラジルに数年間お住まいになっていたことがあり、日系ブラジル人社会に対してとても関心が高く「ラジオニッケイ」の放送のほか、市長と外国人児童の交流会を行っている。公立学校3校・ブラジル人学校2校が参画し児童と父兄



インターネットラジオ「Radio Nikkey」愛知県警出演番組

が交流の絆を深めている。

### ③ ブラジル人に安心届けたい…愛知県警が出演

日本で暮らすブラジル人にも安心を届けようと県警は、ポルトガル語を話す警察官が身近な交通ルール、110番の掛け方などを伝え、防犯情報などを説明するトーク番組に出演している（毎月第三金曜日）。外国人の中には母国では自転車の二人乗りなど違反ではなく知らず知らずにルール違反をしてしまうこともあると言う。文化の違いからトラブルに巻き込まれることもあるし、110番のかけ方も知らないという人も多い。警察官がラジオを通じて母国語で話しかけてくれることは本当にありがたいことである。

県警によるとブラジル人が運営する放送局で、警察が広報活動に取り組むのは全国で初めてという。

Radio Nikkey

<http://www.radionikkey.jp>

### サッカー教室で友達の輪

ABTは、在住外国人の児童生徒を対象にサッ



サッカー教室

カーおよびフットサル教室を開設している。スポーツを通じて団体や社会生活でのルールなどを学び、「居場所」づくりをすすめようとするもので、不就学の児童を含めサッカーの輪を広げる。

市の委託を受けて、名古屋グランパスのプロサッカー選手による「サッカークリニック」も毎年開催している。

また、社会人対象としても在住ブラジル人と一般市民の国際交流が推進されるよう、フットサルチームを運営している。

### 不就学の外国人児童支援「虹の架け橋教室」

ブラジル人を中心に約1万6,000人の外国人が住む豊橋市で、学齢期にありながら学校に行っていない「不就学」の外国人児童・生徒が12人に上ることが市の調査でわかった。背景には、経済的な事情だけでなく、いじめに遭ったり、日本語ができず学校になじめなかったりすることがある。



虹の架け橋教室

ABTでは、IOM国際移住機関の委託をうけて「虹の架け橋教室」を開講している。教室に通っている児童は家でテレビをみたり、ゲームをしたりしていたが、「友達もできたし、授業が受けれてうれしい」と笑顔を見せるようになった。

市教育委員会や外国人の集住団地の自治会と連携を取り、公立小中学校へスムーズに入れることを目指している。

### おわりに

日本に在住する外国人たちは、多様な社会的・文化的背景の中にあって、好むと好まざるに関わらず多くの支援を受けざるを得ない立場にある。

しかし実情は、永く日本に住み、日本の社会にもっと溶け込み、ともに幸せに暮らしたい、ともに社会に貢献したいと望んでいる者がほとんどである。

ABTは、日本人と外国人の架け橋となって、共に学び、共に働き、ともに安心して暮らせる多文化共生のまちづくりのための活動をする時、在

住する外国人たちも笑顔のあふれる、よりよい活気のある地域づくりに貢献できることが見えてきた。

今後とも、豊橋市や地域の住民と連携して在住外国人と地域の活性化のためにたゆまぬ活動を続けたい。

## 在日コリアンが試みる大阪の地域活性化

特定非営利活動法人コリアNGOセンター 事務局長 キム クァンミン 金 光敏

### 生野コリアタウンから始まる新しいまちづくり

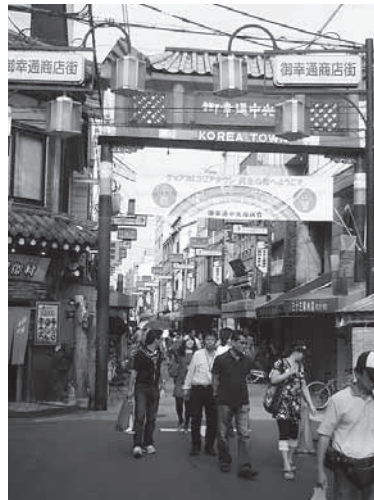
「今まで知らなかった韓国・朝鮮文化に触れ、日本に外国の人々の暮らしがあるのだということであらためて知ることができました。日本にいたが韓国に来たみたいで、楽しかったです」。

生野コリアタウン体験学習に取り組んだ中学生の感想だ。生野コリアタウンの特徴は、韓流ブームもあり、今多くの訪問客で賑わうが、児童生徒学生らの訪問が毎年1万人を超えていることが特徴である。生野コリアタウンは商店街であると同時に、出会い、学びの多目的空間として発展を遂げつつある。

生野コリアタウンは、大阪市生野区に位置し、全長約300mの商店街である。生野区の人口は約13万3,000人。そのうち外国籍者数が約3万2,000人。外国籍者の93%がコリアンである。



生野コリア体験学習プログラムでキムチ漬  
け講習に取り組む高校生



人で賑わう生野コリアタウン週末には遠方  
からの訪問者も目立つ

大阪は戦前「東洋のマンチェスター」と呼ばれ、日本最大の経済都市だったが、それを支える重要な労働力として朝鮮人が使われた。1940年当時、大阪市の人口に占める朝鮮人比率は10分の1に達し、大阪の近代は朝鮮人とともに歩んだといっても過言ではない。巨大な生野区の朝鮮人集住地は、戦前のそのころに生まれた。

生野コリアタウンの正式名称は、御幸通商店街といい、入り口に鎮座する御幸森天神宮の参道として栄えた元々は普通の商店街であった。ただ、その脇に折れる路地に朝鮮半島の食材や衣類、雑貨を売る市場が早くから自然発生的に誕生している。戦前の地域新聞「民衆時報」が「二百余名の朝鮮人が路地に商品を並べて売っている」と報じている（1935年）。

生野コリアタウンは、もともと「朝鮮市場」と呼ばれ、現在でもそのほうが馴染み深いと感じる人は多い。「朝鮮市場」が最も栄えたのは1950年代から1960年代にかけて。だが、朝鮮半島出身者に対する無知や無理解は差別や偏見となり、次世代への文化継承を難しくさせ、在日1世から2世へ、そして3世へと世代が進むにつれ、旧来の伝統的生活スタイルは衰退し、「朝鮮市場」の商売もだんだん斜陽となっていった。空き店舗も増え、市場が無くなってしまわないかの心配を商店主らは募らせた。

空き店舗が目立ち始めた1980年代後半、転機が訪れた。1988年のソウルオリンピックに前後して、日本社会における韓国理解に変化が見え始めた。それを好機に「コリアタウン構想」が持ち上がる。



生野コリアタウンは関西圏で食を楽しむタウンスポットとして親しまれる民族色を活用して商店街の特色化をはかろうというものだった。ゲート設置、カラー舗装、民族色彩の街路灯など。韓国への親近感が深まりつつあった日本社会で、民族色がセールスポイントになり始め、ゲートに「KOREA TOWN」の文字を入れた。

### ワールドカップが大きなチャンスに

1996年にワールドカップサッカー大会の日韓共催が決まり、1998年に就任した金大中韓国大統領は、韓国における日本の大衆文化開放を進め、日韓の国民交流は質的に大きな発展を遂げた。また、2000年の南北首脳会談をはじめ、国際スポーツ大会での南北共同入場行進などが実現した。これらの政治動向がメディアの関心を生野コリアタウンに向けさせ、その存在が広く知られるところとなった。

2003年、日本で放送された「冬のソナタ」は空前の韓流ブームを生んだ。韓国への関心はより厚いものへと変化し、生野コリアタウンに新しい客層をもたらした。特に、以前から行政、学校、企業などの人権研修地として生野コリアタウンが取り上げられていたが、それらの研修をより多角化し、開かれたプログラムへと組みなおし、新しいコミュニティビジネスとして生かす私たちの模索が始まる。その頃、教育旅行の学習プログラムの多様化をめざしていた旅行会社の意図とも一致し、生野コリアタウンをフィールドに、コリア文化の体験学習プログラムを本格開始した。日本と朝鮮半島の縁を歩く地域フィールドワーク、キムチ漬け講習、伝統楽器体験、テッコンドーなどの



中国の子どもが多く在籍する学校における母語指導（門真市）

プログラムを開設し、在日コリアンの経験談を語り、多文化共生に向け私たちに何ができるのかを問いかける。

加えて、商店街で本場コリアの味に舌鼓を打ってもらい、買い物も重要なプログラムに位置付けている。訪問者と商店街の双方にプラスを導くための工夫だ。町が経済的に自立することはとても大切なテーマなのだ。

商店街である生野コリアタウンに学び場としての役割が与えられている。困難を乗り越えてきた商店街と、私たちNPOの連携が結んだ共生社会に向けた新たな試み。いつかどこかで子どもたちが、共生社会の担い手となってくれることを願っている。

### 国境を越えて考える思考、地域に根ざした実践

コリアNGOセンターは、教育、人権、統一問題に取り組んできた三団体が統合し2004年に発足した。在日コリアン社会は、日本に生活基盤を築いた初めてのエスニックコミュニティと言っていだろう。また、差別克服の運動を先導することで、日本の国内における外国人住民の人権伸長に大きな役割を果たしてきた。マイノリティ当事者によるマイノリティ当事者のためのNPOとして私たちは先駆的役割を担っていると考えます。

コリアNGOセンターは、大阪から出発し、関西圏では比較的によく知られる団体となった。その背景には現場での実践活動に力点を置いていることと、マジョリティ社会の理解を紡ぎ出す作業を決して軽視しないことにあるだろう。前で報告した生野コリアタウンでの取り組みもその例だと



ワンコリアフェスティバル

言える。当センターは、いくつかの重要なミッションを掲げて発足した。そのうちの 하나가外国人の子どもたちの教育権保障だ。子どもたちが持つ独自の民族性や文化性を生かしながら、多様な選択肢の中で進路を切り開いていける社会をめざしている。学校で取り組む国際理解や人権学習コーディネートを多く務めているが、その際、在籍する外国人の子どもを支えるための学習展開を重視している。

また、困難な問題に直面した子どもたちを支えるための学校、地域を越えた支援活動にも取り組んでいる。日本語の不自由な子どもたち、不安定な経済状況の中で暮らす外国人家庭、子どもの存在を中心にしながら孤立を防ぐ支援を行なっている。私たちは第三者でありながらも、マイノリティとしての当事者性を持っている。そこを生かしながら、学校と教育行政との協働に取り組み、子どもの最善の利益を生み出す環境づくりに今後もさらに努力を続けたいと思う。

一方、コリアNGOセンターは、朝鮮半島の統一、さらには東北アジアの平和に視野を置く市民活動にも取り組んでいる。「統一」や「東北アジア」のテーマは、市民生活からほど遠い。だが、朝鮮半島、東北アジア地域に冷戦構造が残り、人権確立と平和構築に不安が払拭できずにいる状況は、

政治、経済のみならず、文化、学術などあらゆる分野の障壁となっている。在日コリアンをめぐる差別問題も、この不安定性に起因する側面も小さくない。

日本とコリアの境界の上に立つ在日コリアンは、これらの障壁を乗り越えるのに有利な存在であり、当センターはその牽引車の役割を果たしたいと考えている。毎年10月の第4日曜日に「ワンコリアフェスティバル」を開催している。このイベントは、文化の力で朝鮮半島の統一、東北アジアの平和を創造していこうという祭典である。大阪ではすでに市民権を得た市民イベントで、今年26回目を迎える。大阪城公園太陽の広場を会場に、仮設の大型舞台を設置し、それを取り巻くようにさまざまな出店が並ぶ。もっとも多いのはコリアの芸能やフードだが、最近ではアジア各地のアーティストの出演やフードも増えている。

### 境界から共生へ

大阪は、都市づくりの中で、在日コリアンが多い特性を生かしきれていない。その背景には、在日コリアンを差別問題のファクターでだけで捉える視点が先行しているからだ。朝鮮半島への理解も変化し、社会の多民族化や多国籍化が進んだ今、大阪において「コリア」が身近にあること、「アジア」が都市に息吹いていることは、都市が求められる多様性をすでに早い時期から内包してきたことを示し、それが大阪の魅力なのだ。その意味をさらに日本全国に発信したいと考えている。

当センターは、東北アジアの観点から思考し、そして実践は人と人がつながれる草の根の地域社会から始める。「境界から共生へ」は、当センターの掲げるスローガンだ。多文化共生の時代の市民協働をめざしたい。

## 【取材レポート】

### 在住外国人が介護の職場を活性化～外国人のための就職支援講座受講生の活躍～

(財) 自治体国際化協会多文化共生部多文化共生課 主事 大野 鮎子 (堺市派遣)

外国人登録者数が、全国で5番目(12万3,600人/2009年末現在)に多い埼玉県。リーマンショックなどの影響で、全国的に外国人登録者数が減少している中、埼玉県は年々その数(注1)を増やしている。

また、日本は、2007年に65歳以上の人口が21%(注2)を超え、「超高齢社会」に突入した。埼玉県においても、2010年をピークに人口が減少し、以後急速に高齢化が進むものと予想されている。高齢化の進展にともない、今後ますます介護のニーズが高まっていくと考えられる。

そのような状況の下、これまでさまざまな形で在住外国人の支援を行ってきた(財)埼玉県国際交流協会は、2009年度に日本に定住している外国人を対象に「介護の仕事に役立つ日本語教室」を開催した。受講者はペルー人8名、ブラジル人4名、中国人3名、韓国人2名、タイ人、フィリピン人、ボリビア人が各1名ずつの計20名であった。その受講生の1人が今回ご紹介する趙誠子(チョウ・ソンジャ)さんである。

趙さんは韓国出身で、日本に来て今年で18年になる。趙さんは、2009年8月から10月まで「介護の仕事に役立つ日本語教室」で介護の基礎、日本語講座、介護実習を受講した後、ヘルパー養成講座に通って資格を取得した。現在は埼玉県戸田市にある「グループホームくつろぎの家」で、介護ヘルパーとして働いている。日本語が堪能で日本文化にも通じている趙さんは、日本と韓国の文化・習慣の違いなどを明るい話題として取り上げ、グ

ループホームの雰囲気をやかにしている。また、趙さんが作る韓国料理はグループホームの入居者の皆さんの中で好評で、その中でも韓国海苔巻やビビンバは特に人気がある。

## インタビュー

### 【趙さん】

♣なぜ介護の仕事をやろうと思われたのですか。

ハングル講座の講師として在日韓国人のお年寄りと接しているうちに、お年寄りのお話を聞いてあげたり、美味しい料理を作ってあげることで、お年寄りにより良い時間を過ごしてもらいたいと思うようになりました。

そこで、ヘルパーの資格を取ろうと思いましたが、漢字や言葉に自信がなかったため、あきらめていました。そんなとき埼玉県国際交流協会で「介護の仕事に役立つ日本語教室」があることを聞き、受講することにしました。この講座を修了してもヘルパーの資格はもらえないので、講座修了後、3カ月間、資格取得のため学校に通いました。講座でしっかりと専門用語や介護の基礎を学んだおかげでスムーズにヘルパーの資格がとれました。今度はさらに上のケアマネージャーの資格に挑戦してみたら、と周りからアドバイスされています。

♣介護の仕事はどのようにですか。

入居者の皆さんを自分の親だと思ってお世話しています。皆さんが喜んでくれる言葉は何がいいかとか、どんな料理を作ったら喜んでくれるかなどを考えながら、楽しく仕事をしています。皆さんから歌や踊り、文化、習慣の違いなどを教えてもらうこともあります。入居者の皆さんにとって、私に説明することや体を使って示すことは、適度な刺激となり脳や身体に良い影響があるようです。

♣これからの夢は何ですか。

夢は介護の世界でお年寄りを幸せにすることと、子どもたちへのハングル講座をこれからも続けることです。







♣他の在住外国人の方にメッセージをお願いします。

日本に住むのだから、日本を好きになって楽しく暮らすことが大事です。同時に自分の国に誇りを持って、外国人の自分が得意とすることをして、日本を盛り上げていきましょう。

趙さんに加え、趙さんと一緒に働く介護主任の井関健史さんにもインタビューに答えていただきました。

【介護主任の井関健史さん】

♣趙さんについて教えてください。

すごく性格が明るく、いつもニコニコされているので、グループホームの雰囲気が良くなります。

また日本人スタッフとは違う話題を入居者の皆さんに提供できるので、文化の違いなどを話し合っていて盛り上がっているようです。お互いに教え合うことは、入居者さんにとっても頭の体操になっていいことだと思います。

♣外国人ということで苦労されていると思われることは何ですか。

料理ですね。ここではスタッフが料理を作りますが、入居者の皆さんが求める日本のおふくろの味を作ることに、最初のうちは苦労されていました。でも今では、韓国人ということを生かして韓国料理を作っています。韓国海苔巻やビビンバなどは皆さんに大変好評でした。

♣外国人ということでよかったと思われることは何ですか。

趙さんがいるときは女性が盛り上がります。こ



れは日本人と外国人ということだけで違うわけではなく、趙さんのキャラクターによるものだと思います。そういった意味では、介護の世界は人対人になるので、その人がコミュニケーションをとれる人であれば、外国人でも問題ない職場だと思います。日本語が全く話せないと難しいでしょうが、外国人ということによる支障はないので、バリアーのない職場と言えると思います。

【インタビューを終えて】

趙さんは介護の仕事を通じて、自分は日本の社会で必要とされていると感じ、地域社会の一員としての意識も高めています。一方、グループホームの入居者の皆さんも趙さんのおかげで外国人に対する理解を深めながら、明るい人生を過ごしているようです。まさにこのグループホームに外国人と日本人とが共存共栄する多文化共生社会の縮図を感じることができました。

なお、(財)埼玉県国際交流協会は2009年度に実施した「介護の仕事に役立つ日本語教室」が大変好評だったことから、2010年度は「介護の仕事を始めよう！～外国人のための就職支援講座～」とし、介護施設などでの実習を含んだ実践的な講座に発展させました。実習で協力をいただいている介護施設の方々からは、「外国人の方の熱心さや真面目さに接し外国人に対するイメージが変わった」とか、「むしろ日本人介護職員への良い刺激になり感謝している」といった言葉をいただき、同じ地域に住む外国人への理解にも役だっているそうです。

取材を通して、在住外国人の方が地域に溶け込み、地域の日本人の方々とともに活躍しており、このような取組みが広がって行けば、地域を明るく元気にし、多文化共生の社会づくりに貢献することに気づかせていただきました。

(注1) 平成11年から平成21年の10年間で約1.7倍の増加。(全国平均は1.4倍)

(注2) 平成22年度版高齢社会白書(内閣府)によると、現在の高齢化率(総人口に占める65歳以上の人口の割合)は22.7%(総務省「人口推計」平成21年10月1日現在)。なお一般的に、高齢化率7~14%で「高齢化社会」、14~21%で「高齢社会」、21%以上で「超高齢社会」と定義されている。

(注3) 経済連携協定(Economic Partnership Agreement : EPA)は、経済条約の一つで、自由貿易協定(FTA)を柱として、関税撤廃などの通商上の障壁の除去だけでなく、締約国間での経済取引の円滑化、経済制度の調和およびサービス・投資・電子商取引等のさまざまな経済領域での連携強化・協力の促進等を含めた条約である。